【報告】

予期的社会化プログラムを視野に入れた精神看護学教材の作成と活用の検討

― 看護大学生の特性と眺める対人状況の風景の違いに焦点を当てて ―

入江 拓　　清水 隆裕

聖隷クリストファー大学　看護学部

A study on the creation and use of psychiatric and mental health nursing educational materials with a view to anticipatory socialization program

- With a focus on differences about the “the scenery” of the interpersonal situation as viewed by the characteristics of nursing university students -

Taku Irie, Takahiro Shimizu

Seirei Christopher University, Faculty of Nursing

抄録

精神看護学の初学者（n=155）の特性を「課題に向かう志向性」「ユーモアに対する態度」「曖昧さ耐性」を指標に把握し、「人」「患者」「精神疾患を抱える人」にかかわることへの自由記述データをテキストマイニングにより学生の眺める「風景」として解析した結果、「人・患者」とかかわることと「精神疾患患者」にかかわることは質的に相違があることが確認された。「曖昧さに耐え支援的ユーモアを用いる傾向が高い学生」は、人や患者とかかわることを【面倒】だが【楽しく】【成長】に【必要】なことと捉え、「問題解決志向で攻撃性や皮肉・怒りを含んだユーモアを用いる傾向が高い学生」は、人や患者と関わることを【病】を【支える】【責任】ある【仕事】と捉えていた。【精神】【疾患】患者とかかわることに関しては、どちらの学生も【未知】【不安】で【理解】が【難しく】【怖い】と捉えていた。上記結果をもとに教材を作成し、その活用について検討した。

キーワード：精神看護学教育、テキストマイニング、予期的社会化プログラム、看護大学生、風景

Ⅰ．緒言

精神障がい者に対する「内なる偏見の克服」と「曖昧さに耐えつつ伴う力」は、精神（科）看護に携わる者に必須の素養である（入江，2011）。しかし、学生が社会化される過程で常識として身につけた精神障がい者に対する偏見やそれに伴う構え（入江ら，2005，p２）に加え、問題解決志向が優位な文化的特徴（入江，2001）をもつ看護基礎教育の枠組みの中での体験が、学生の精神保健をむしろ低下させ、精神看護に必要な素養を学ぶ貴重な機会を奪っている可能性がある（入江ら，2012）。川村は、看護教員の教授行動に関する学生の語りの質的分析から、看護教育場面の孕む暴力性について倫理的な視点から指摘している（川村，2013）。

精神（科）看護の素養の育成に関して様々な制約がある学部教育環境の中で、学生がより機能的であるためには、ある程度の精神健康度の高さが必要であり、それが高いほど精神看護実習などの対人状況における対処戦略のバリエーションが広く（入江，2005，p７）、支援的ユーモアは精神健康度に寄与しうるとされている（宮戸ら，1996）。単にサービス発給の知識や技術の教授だけではなく、学生が精神健康度を維持発展させ、卒後のキャリアを望ましい形で重ねうるために提供すべき教育枠組みやそれを下支えする理論的概念にはどのようなものが適切なのだろうか。

ちなみに、Wanous(1980) は、将来を見越して行われる社会化(予期的社会化；anticipatory socialization) に関して、「この時期は将来の仕事に常に緊張した期待を抱くものであり、そのような緊張した期待がリアリティーショックを招く」と述べ、そのような非現実的な期待を持たせないように、ネガティブなものも含めた正確な情報を提供するためにRJP（Realistic Job Preview）を提唱している。

尾形は個人の組織社会化（organizational socialization）は、組織に参入する以前から始まっており、その前段階である予期的社会化の段階に影響を与えるものとして、「情報の質と情報源」「期待」「訓練」の３つの要素を挙げている（2008）。看護専門職に関して言えば、この時期は学部教育に相当する。

学生が看護基礎教育段階において、また卒後のリアリティーショックなどの課題に対処しつつも、ある程度の精神健康度を維持発展させるためには、これら３要素について予期的社会化プログラムの視点から吟味し、カリキュラムを通して明示的かつ、体系的に提供してゆく必要があると思われる。

組織に参入した新人が最初に遭遇する課題は、新人の内面で生じる「メンタルタスク」と組織や仕事について学習しなければならないという「ラーニングタスク」であるとされている（尾形，2008）。これらを踏まえ、精神看護学の講義および､精神看護学実習を､それぞれ「情報の質と情報源」および、「訓練・期待」が主として吟味され提供される機会として位置づけ検討することにより、教育側が学生に提供すべきことや、そのための教材、教育方法が具体的に見えてくると思われる。

また、その際には教育の対象である学生が、こちらの提供する情報をどのように認知しているかなどを事前に把握することが必要不可欠である。精神看護学の初学者に関して言えば、将来の専門職として想定される「対人状況」をどのように認知（イメージ）しているかという実態調査を踏まえて、「メンタルタスク」を視野に入れた教育内容と方法が吟味されることはとりわけ重要であろう。

Ⅱ．目的

本研究の目的は、精神看護学の初学者である看護大学生を対象に実態調査をおこない、学生集団および個人の心理学的特性を明らかにするとともに、学生がさまざまな対人場面をどのような「風景」としてイメージし、そのイメージが自身の心理学的特性とどのように関係しているかについて安全に知り、ディスカッションすることができるような「メンタルタスク」を想定した教材（媒体）を作成し、予期的社会化プログラムを視野に入れた精神看護学教材としての活用可能性を検討することである。

精神看護学の初学者である看護大学生は、社会化される過程において、「人とかかわること」をどのような「風景」として眺めてきたのだろうか。また、看護学教育に特化した集団の文化の中で教育訓練を受けている現在、そして将来実習生や看護師として「病を抱えて生きる人」や、さらには「精神疾患を抱えて生きる人」に対峙する自分を、どのような「風景」の中に眺めているのだろうか。

Ⅲ．対象・倫理的配慮

分析対象は、2011年度２年次開講の精神看護学概論の受講生のうち155名分の質的データ（自由記述12,617字）および、「ユーモア特性」「課題への志向性」「曖昧さ耐性」尺度にて測定された量的データである。データは、「対象者の全人的理解を妨げるもの」と題した講義において、「自己を看護援助の道具として活用するための自己理解」の演習の中で収集された。分析結果は講義の中で全体に解説し、個別には資料とともに紙面で返却した。

成績評価終了後、学生には書面と口頭にて研究目的および、協力は任意で途中辞退可能であることをその方法と併せて説明し、データ使用の承諾を得た。本研究は全て聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得ておこなった。

Ⅳ．用語の操作的定義

対人状況：看護大学生が、社会化される過程で培ってきた対人状況と、将来に想定される対人状況を、それぞれ「人と関わること」、「患者と関わること」、「精神疾患を抱えて生きる人と関わること」と想定した。

風景（the scenery）：テキストマイニングソフトウェア（Trend Search:SSRI）によるスプリングシミュレーション[注)]を経た解析により、学生が記述した文章の中に出現する「言葉」どうしの関係性と結びつきの強さを、統計学的アルゴリズムに基づき二次元平面上に配置することにより視覚化したもの。一般的に「風景」といえば「景観（landscape）」と「風景（scenery）」が想起されるが、景観が視覚を中心にした概念であるとすれば、風景は視覚以外に他の五感も広く含まれた概念であるといえる。対人状況の風景は、まさに学生個々の認知的体験の影響を受けて眺める風景であり、それらを表現した「文章」は本人の認知を反映したものとした。

看護大学生の特性：看護大学生の対人状況におけるストレス対処のあり方に影響を及ぼす「ユーモア特性」「曖昧さ耐性」および、学生にとっての環境である看護教育や臨床の文化によって強く規定される「課題への志向性」の３つの尺度によって測定された総合的特性。

予期的社会化プログラム（anticipatory socialization program）：「将来を見越して行われる社会化（予期的社会化）」の概

念は社会学者のマートンにより提唱された(R.K.Merton, 1949/1961)。近年ではヒューマンスキルプログラムとして学生時代から始まるキャリア開発支援分野で活用されている。入江は、看護学教育においては、自分たちが所属している集団や、また近い将来所属する集団の特性や自身の特性に関する洞察を安全に深め、単なる看護サービス発給技術の習得のみならず、社会的技術（social skill）や、論理的思考の手順や方法を系統的に学び、また、対人援助職に特徴的な感情労働に際して避けて通れない自分の感情や、その感情への対処や適応に関する社会的技術を学内講義から臨床看護実習の連続性の中で高めるべく体系的に構築されたプログラムが必要であると述べている（2002, p26)。

Ⅴ．道具

ユーモア特性尺度（宮戸・上野, 1996):ユーモア尺度は以下の下位尺度により構成される。

攻撃的ユーモア（自己や他者を攻撃したり中傷することで楽しむユーモア)。

遊戯的ユーモア（自己や他者を楽しませるための日常的で他愛もないユーモア)。

支援的ユーモア（自己や他者を励まし、許し、心を落ち着けるユーモア)。ユーモア感覚を持つことは、ストレス緩和や精神的健康に結びつく傾向がある。実質的に精神的健康に寄与しうるのは、支援的ユーモアであり、攻撃的ユーモア、遊戯的ユーモアは、一時的な気分転換に限定される。24項目５件法で測定する。

看護大学生が課題に向かう際の志向性尺度(Doing-Being Scale, 入江, 2010)：学生が実習で受け持つ患者や、看護上の対人状況で課題に対処する際に陥りやすい「囚われ」や「構え」を想定した。高得点であるほど、曖昧さに耐えるよりは問題解決志向で状況や課題に対処する傾向があるとし、それをDoingと定義した。また、その対極にある志向性として、曖昧さに耐えつつ状況にリラックスして臨む傾向をBeingと定義した。10項目５件法で測定する。

曖昧さ耐性尺度（増田, 1994)：曖昧な状況に認知的に耐えられるかどうかの個人差を測定する。高得点ほど曖昧な状況に耐えられるということを示し、逆に低得点だと白黒がはっきりしないと落ち着かず、その状況を脅威と捉える。24項目５件法で測定する。

Ⅵ．方法および分析の手順

１．2011年度２年次開講の精神看護学概論受講者で研究協力の承諾を得た155名から収集された自由記述データ（12,617字）を、テキストマイニングソフトウェアTrend SearchおよびWord Minerにより解析した。自由記述は「自分は～と関わることを～」という形式で記述されたものを解析対象とした。学生が眺める「風景」の解釈は、Trend Searchの出力結果に対し、「自分」を起点に、ターゲットとされる各対人状況を象徴する「人」「患者」「精神疾患を抱える人」に至る言葉のつながり方や、その周辺に布置される言葉同士の関係性もふまえて連想法による解釈おこない、訴求性のある教材（媒体）として活用すべく整理した。

２．看護大学生集団（２年次生, n=155）の総合的特性を把握するために、「ユーモア特性」「課題への志向性」「曖昧さ耐性」尺度を指標に主成分得点を変数としたクラスター分析を実施し散布図を作成し、判別分析により各クラスター（以下：Clus.）の重要項目を確認した。

３．各Clus.の対人状況ごとの学生の特徴を明らかにするために各Clus.を構成する自由

記述データに対して、Word Minerにより解析をおこない、藤井ら（2005）の手順にて構成要素（記述された言葉）の出現頻度による有意差検定をおこなった。

1）各対人状況に関する自由記述の文章に対し、Word Minerにより分かち書きをおこない、解析上無意味な句読点、助詞、特殊記号を削除するなどのデータクレンジングをおこなった。

2）意味不明な単語が抽出された時は、その都度原文参照をおこない意味を確認し、適宜分かち書きを回避する判断をした。

3）さらに構成要素を整理し、分析見通しを立てるために、意味が近い語は置換辞書を作成し、ひとつの語に置換する手続きをおこなった。得られた構成要素を対象に、出現頻度５以上のものに対して対応分析をおこない、Clus. ごとの構成要素リストを作成した。

4）各Clus. の構成要素のリストのうち、出現頻度による有意差検定（$p < .03$）のものを抽出し、構成要素の意味について原文参照にて再度確認し、それを各対人状況の風景を構成する重要な「言葉」とした後、これらの結果を総合的に検討し、訴求性のある教材（媒体）としての活用や、教育的介入を安全におこなうための学生理解の一助とすべく図表に整理した。

４．作成した教材（媒体）について、学生が特に感情労働的側面の強い対人援助職への社会化に際して必要な、自己の情動や認知などの特性と現実状況への対処の傾向を把握し、それを安全に言語化できるための「メンタルタスク」に関する教材としての活用について検討した。

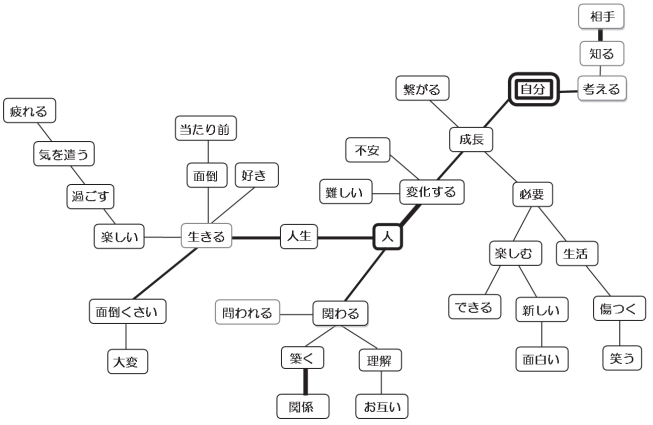
Ⅶ. 結果および考察

１．精神看護学初学者の看護大学生155名が記述した３種類の対人状況（人と関わること、患者に関わること、精神疾患を抱えて生きる人と関わること）それぞれに関する自由記述データに対してテキストマイニングを行った結果、以下のことが明らかとなった。

1）質的データ（自由記述）の解析により、描画された関係線によって結ばれる言葉同士の繋がり方および、関係線の太さの違いで表される結び付きの強さの違いから、学生が眺める各対人状況の「風景」それぞれに視覚的な違いおよび、解釈上の違いが確認された。このことから、学生にとって「精神疾患を抱えて生きる人」とかかわることは、「人」や「患者」とかかわることとは明らかな質的相違があることが確認された。これを、学生が眺める対人状況「風景」として想定し、学生の安全な自己理解のための教材化をふまえて検討し、紙面の許す限り詳述、整理した（図１）。

2）臨床実習を本格的に体験する前の看護大学生は、看護を目指す学生としての役割やそれに伴う動機づけに裏打ちされた知的な理解を踏まえて、将来の風景の中に「患者と関わること」を明確に眺めているが、「精神疾患を抱えて生きる人に関わること」については、リアリティーのある状況としては認知していない。

２．精神看護学初学者の看護大学生集団（２年次生，n=155）の総合的特性は、【課題に向かう際の志向性（曖昧さ耐性）】の程度と、【ユーモア特性】を二軸とする平面上に４つのClus. で表された。また、各Clus. を特徴づける心理学的特性を重要項目として判別分析により明らかにし、図２中の各Clus. の該当箇所に【課題に向かう際の志向性（曖昧さ耐性）】⇒【曖昧さ】、【支援的ユーモア】⇒【支援】、【遊戯的ユーモア】⇒【遊戯】、【攻撃的ユーモア】⇒【攻

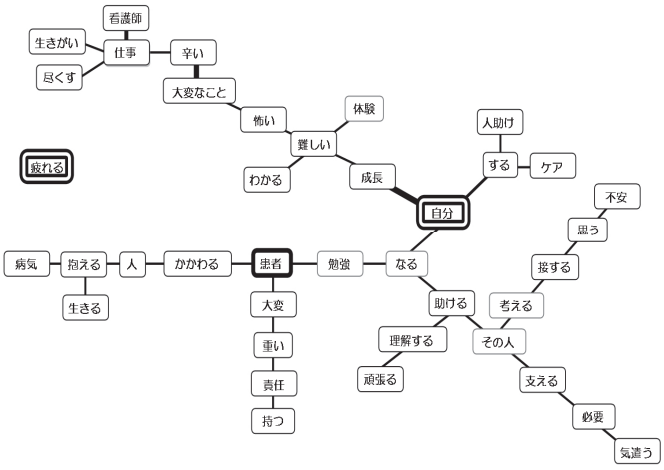


人と関わること

「自分」が「人」と関わる事のあいだに「成長」があり、成長のためには「不安」や「難しさ」を伴う「変化」は避けられないという風景を現実的かつ肯定的に眺めている。「生きる」ことは「気を遣」ったり、「大変さ」や「面倒」なことでもあるが、「当たり前」の現実そのものであり、そのような現実を生き抜いてきた「人」と「自分」が「繋がり」を持つことが、自分の「成長」を促す「変化」に直結している、と捉えている。

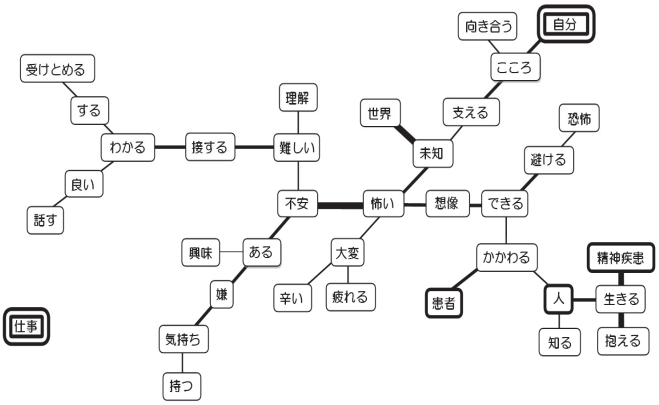
「人」と「関わる」ことは「関係」を「築く」こと、そしてそれらが「問われる」ことである。

「人」と「関わる」ことはいろいろと苦労や気遣いをしながら、現実的な「人生」を「生きて」きた人と繋がることであり、それらのことは、「気を遣い」「疲れる」ことでもあるが、同時に「楽し(い)」ことでもある、という風景を眺めていることが推察される。



患者と関わること

「患者」と関わることをイメージする際に、「成長」する「自分」、「ケア」や「人助け」をする「自分」、「患者」とつながり「助け」ることができるように「なる」ための「勉強」は避けられないという3種類の「自分」のあり方をその風景の中に眺めている。「人と関わるということ」を想定して眺める風景と同じく、学生は患者と関わる際の対人状況においても、その風景の中に「自分」の「成長」を明確に眺めている。学生は「仕事」としての「看護師」を「自分」の「成長」の延長線上に眺めているが、その道のりは「難しい(困難な)」もので、将来体験するであろう「辛く」「大変なこと」を「怖い」というイメージの背後に想定している。同時に仕事としての看護師については、否定的なイメージだけでなく「生きがい」「尽くす」という肯定的なイメージも併せて抱いていることが伺える。看護大学生(2年次生)にとっては、「看護師」に至るまでの道のりは厳しいが、それを目指しての明確な動機が伺える。「勉強」を経て「患者」に「かかわる」ことは「重い」「責任」を「もつ」「大変」なことであり、それはとりもなおさず「病気」を「抱えて」「生きる」「人」と関わることにほかならない。「疲れる」が描出されているが、他のどの言葉とも繋がりがない。まだ患者を受け持つ実習経験も乏しい学生にとっては、単に「人と関わる」対人状況以上の苦労が要求されるだろうという漠然としたイメージとしての「疲れる」が風景の中に浮遊しているかのようである。



精神疾患を抱えて生きる人と関わること

*関係線の太さの違いにより、言葉同士の結びつきの強さの違いを表現している。

「不安」の背後には、感情的な「嫌」という抵抗と併せて、「興味」も「ある」という両価的な思いや気持ちがあることが推察される。「わかる」ためには「受けとめる」ことや、実際に「話す」ことが「良い」こともわかるが、「接する」ことに「不安」と「恐怖(怖い)」があるため「理解」は「難しい」と受け止めていることが推察される。「自分」から「精神疾患を抱えて生きる人」までの関係線の複雑さと隔たり感は、「人」や「患者」をその対象に想定した対人状況の比ではない。精神疾患を抱えて生きる人に関わること以前に、「こころ」に「向き合い」、「こころ」を「支える」という風景を眺めており、「未知」なる「世界」の先には、強く関連し合う「不安」と、関わる際の「大変さ」を背景とした「怖い」をイメージして眺めている。その意味では、学生の精神疾患を抱えて生きる人のイメージは否定的な意味を伴った想像の域を出ていない。また、「恐怖」を「避ける」ことが「できる」のか、「かかわる」ことができるのかを怖々と「想像」している学生の有り様が推察される。「想像」を通して、「患者」と「精神疾患を抱えて生きる人」を別々の対象として眺め、関わる対象者のイメージとして統合されていない。「仕事」が描出されているが、将来仕事として関わる可能性はゼロではないと理解しつつも、対象としては「未知の世界」と「不安」を挟んで「自分」からは距離がありすぎるので、漠然としたイメージとして風景の中に浮遊しているかのようである。

図１　精神看護学初学者の看護大学生が眺める各対人状況の風景　n=155

Clus.4⇒攻撃的ユーモアを活用しながら、曖昧さに耐えリラックスして状況に臨む

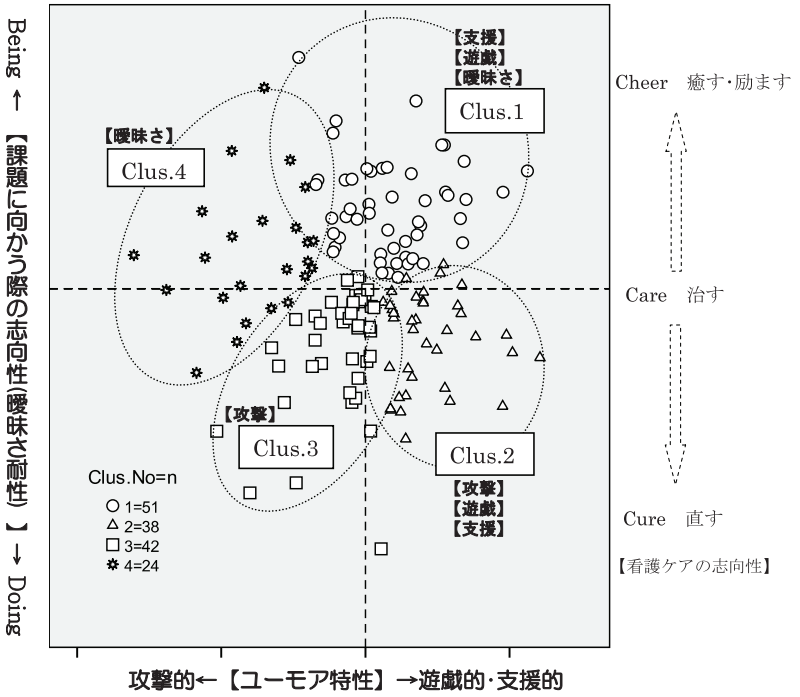
有意差検定	人と関わることは	患者と関わることは	精神疾患を抱えて生きる人と関わることは
上位1位	楽しいこと	仕事	精神疾患
上位2位	日常生活	やまい	あまり関わりたくない
上位3位	幸せなこと	責任があること	怖い
上位4位	その人	援助すること	よくわからない
上位5位		看護師	世の中を知る

Clus.1⇒遊戯的・支援的ユーモアを活用しながら、曖昧さに耐えてリラックスして状況に臨む

有意差検定	人と関わることは	患者と関わることは	精神疾患を抱えて生きる人と関わることは
上位1位	楽しいこと	病気	未知の世界
上位2位	生きること	患者	精神疾患
上位3位	意見交換	共感すること	どうしていいかわからない
上位4位	自分が自然になる	知ること	不安
上位5位	必要なこと	ケアをすること	どう関わっていいかわからない
上位6位	自分が成長する	生命	理解すること
上位7位	安心		
上位8位	新しい自分		
上位9位	疲れること		
上位10位	人生そのもの		

Being：
・強みを見つける
・味わう、想像する
・リラックス、自然体
・ユーモア.感情.思い
・個別性、主観的
・待つこと、伴うこと
・静的、雰囲気
・自分を見つめる
・自然な感情表出
・柔らかい対人距離
・一回性
・安心感、居場所
・語り
・意味
・非侵襲的
・Doing に対する反発
・Narrative Based…

Doing：
・問題を見つける
・問題を解決する
・失敗は許されない
・タイムプレシャー
・普遍性.法則性
・客観的事実
・動的（止まれない）
・高緊張
・自然な感情表出の抑制
・責任が重い
・相手に働きかける
・何かをする
・予防と対処
・常に根拠を必要とする
・人間疎外
・結論を保留できない
・効率性、経済性、安全性
・Evidence Based…



Clus.3⇒攻撃的ユーモアを活用しながら現実状況に向かいすぐに結論を出そうとする

有意差検定	人と関わることは	患者と関わることは	精神疾患を抱えて生きる人と関わることは
上位1位	楽しいこと	重荷を抱えること	精神疾患
上位2位	人生	患者	未知の世界
上位3位	疾患に関わる	命の尊厳	未知なこと
上位4位	自分が成長すること	共感すること	不安
上位5位	情報収集	ケアをすること	わからない
上位6位	必要なこと	知ること	理解しようとすること
上位7位	安心	すべきこと	怖い
上位8位	疲れること		悩むこと
上位9位	面倒くさい		

Clus.2⇒遊戯的・支援的ユーモアを活用しながら現実状況に向かい、すぐに結論を出そうとする

有意差検定	人と関わることは	患者と関わることは	精神疾患を抱えて生きる人と関わることは
上位1位	楽しいこと	仕事	精神疾患
上位2位	幸せなこと	病気	怖い
上位3位	必要なこと	責任があること	思い通りにならない
上位4位	日常生活	援助すること	未知なこと
上位5位	必要なこと	看護師	わからない

図２ 「ユーモア特性」「課題への志向性」「曖昧さ耐性」尺度を指標にしたクラスター分析結果（n=155）
および各 Clus. の対人状況に関する自由記述内の言葉の頻度による有意差検定結果（p=. 03）

・頻度による有意差検定で抽出された言葉は、全て p<.03。
・判別分析により、各 Clus.を特徴付ける重要項目を、該当する Clus.付近に【課題に向かう志向性（曖昧さ耐性）】⇒【曖昧さ】、【支援的ユーモア】⇒【支援】、【遊戯的ユーモア】⇒【遊戯】、【攻撃的ユーモア】⇒【攻撃】とそれぞれ表記した。

撃】として表記した。

学生が自己の特性と親和性の高い臨床文化をイメージしやすくするために、要求される看護ケアの様相の違いにより、Doing の行動規範が支配的な cure（直す）寄りの看護ケアが優位の文化と、Being の行動規範が支配的な cheer（癒す・励ます）寄りの看護ケアが優位の文化を、care（癒す・治す）を挟むかたちで付置し検討し、以下のことが明らかとなった（図２）。

１）各 Clus. の構成人数と看護ケアの様相への親和性をもとに概観すると、学生の傾向は Cure や Cheer のどちらにも極端に偏るものではないが、遊戯的・支援的ユーモアに親和性が高い学生は、やや Cheer 寄りの志向性がある一方で、攻撃的ユーモアに親和性が高い学生は cure 寄りの志向性があった。

３．各 Clus. の対人状況ごとの学生の認知の特徴を明らかにするために、自由記述データに対して、Word Miner により各 Culs. を質的変数としたテキストマイニングをおこない、Clus. ごとの構成要素について言葉の出現頻度による有意差検定をおこなった。言葉の有意差検定結果は Word Miner により出力され、それをふまえ以下の考察をおこなった。

「精神疾患を抱えて生きる人」と関わることについては、すべての学生は同じような風景を眺めているとも言えるが、Clus. ごとにそれぞれの対人状況の捉え方について詳細に検討すると、学生の特性により眺める風景の解釈において、以下のような特徴的な違いがあることが明らかとなった。

１）Clus.3 は、問題解決志向的な対処行動に親和性が高く、描出された「未知の世界」「不安」「怖い」も踏まえると、心身に一番負荷がかかり易い群で、適切な介入がなされないと過剰適応という形で経過してゆく可能性がある。

２）Clus.4 は他の Clus. とは違い、「あまり関わりたくない」という抵抗感やそれに伴う感情が素直に表出されている。同じく攻撃的ユーモアに親和性が高い Clus.3 と比較すると、課題に向かう際の構えがより Being ＞ Doing であり、負荷のかかる対人状況に対して自己防衛のための程よい距離感を確保できることが伺える。

３）Clus.1 において抽出されている「理解すること」に対応する言葉は、原文参照により Clus.3 では「理解しようとすること」であった。また、精神疾患を抱えて生きる人にかかわることに対して、Clus.3 の方が能動的で距離感が近いため、「不安」に加えて「怖い（恐怖）」を風景の中に眺めやすいと推察される。

４）Clus.3 は、他のどの Clus. とも違い、すでに「人と関わる」対人状況において、「疾患に関わる」「情報収集」「面倒くさい」を風景の中に眺めており、現実状況に問題解決志向で対処しようとする傾向が強く反映されている。

５）Clus.1 で「人と関わること」を「意見交換」としているが、Clus.3 ではそれに対応する言葉が原文参照により「情報収集」であると確認され、その眺める風景の違いからも問題解決志向への親和性の高さがうかがえる。

６）Clus.3 では、有意差がある言葉として描出される言葉の数が、ほかの Clus. に比べて多く、それらを現在から将来にわたる全ての対人状況の風景の中にまんべんなく眺めている。つまり、多くのものが風景の中に見えすぎる状態であり、患者と関わることに対しても「重荷を抱えること」が抽出されるなど、対人状況に対して負担感や疲れ（面倒くさい）を覚えながら、「すべきこと」といった対人援助職として

内外から要求される行動規範で対処する傾向が推察される。看護大学生は臨床に看護者として出る前段階から、怒りや敵意などの表出が乏しくなる傾向を有しており、また、その様な感情規制を促進するような文化を持った集団の中で教育・訓練を受け社会化されつつあるとされ、攻撃的ユーモアの表出との関連性が強く示唆される（入江, 2002, p22）。

7）「人と関わること」については、すべてのClus. で「楽しいこと」「幸せなこと」「生きること」「人生」「必要なこと」「成長」など肯定的な風景を眺めていた。有意差がある言葉の個数はClus.1とClus.3がClus.2とClus.4の２倍程度描出されており、肯定的な面だけではなく「疲れること」「面倒くさい」と負担感についても風景の中に現実的に眺めている。

8）「患者と関わること」については、Clus.2とClus.4が「責任がある」職業としての「看護師」をその風景の中に眺めているのに対し、Clus.1とClus.3は「共感すること」「重荷を抱えること」「ケアすること」などを患者と関わる自身の有り様として眺めている。

9）Clus.3 では、患者との関わりを「重荷を抱えること」と捉え､そこに向かうべく役割･行動規範的な「すべきこと」を眺めており、具体的な行動を視野に置いて能動的に対人状況を眺めているあり様がうかがえる。

10）「精神疾患を抱えて生きる人」と関わることについてはすべてのClus. の学生が、「未知の世界」「どうしていいかわからない」「怖い」「不安」という風景を共通して眺めている。その中身を詳細に観察すると曖昧さへの耐性が高いClus.1では、掴みどころのない対象を前にその風景は「不安」と無力感に彩られており、それに対してとにかく「理解すること」をイメージし結論を保留しながらそこに踏みとどまろうとしているあり様がイメージされる。

11）Clus.2では、Clus.1のような「不安」は風景の中には存在せず、「怖い」という形でClus.1よりはその対象がより具体的で、かつ「思い通りにならない」というコントロール感の乏しさや無力感を意識していると推察される。同じように遊戯的・支援的ユーモアを活用しつつも、課題に向かう際の志向性の違いがその眺める風景に影響を及ぼしていると推察される。

12）「怖い」はClus.2と同じくClus.3およびClus.4にも描出されているが、「不安」と「怖い」の両方を風景の中に眺めているのはClus.3のみである。Clus.2とClus.4が「看護師」という職業（役割）を風景の中に眺めながら「精神疾患」を「怖い」としているのに比べ、Clus.3は職業として関わるというイメージは明確ではなく、「すべきこと」という行動規範で無防備な自身を押し出しながら、現実状況に向かってゆく風景を眺めていることがうかがえる。

13）風景の中に眺める「言葉」の数と内容の比較より、Clus.1は、将来よりも実感を伴う現実状況に対する関心が豊かで広い。Clus.2とClus.4は現在から将来の対人状況をバランスよくイメージし風景を思い描くが、Clus.1よりその眺める風景はシンプルである。

４．本調査結果は、講義の中で学生全体と個別にそれぞれ解説、返却している。その際、自分の特性を踏まえて今後の学習の動機づけとするように勧めている。その後彼らは、2012年秋から2013年夏にかけて精神看護学実習を含む全看護学領域の実習を終了している。

これまで、いくら教育上の必要性があるとはいえ、学生の個人特性に触れるような教育的介入をおこなう際には、学生が警戒的になる傾

向がみられた。しかし、筆者が担当した精神看護学実習において、本研究知見を試行的に活用した結果、関係構築が困難な患者の病理性が及ぼす対人状況への影響と、自身の受け止め方との関連に関する学生との必要なディスカッションがより深く安全に行えたという感触を受けている。また、精神疾患を抱える患者と関わる事に困難と戸惑いを覚える学生や、臨床的な課題を抱える学生のあり様の理解の一助として本知見をふまえて支持的教育介入を試みた結果、おおむね肯定的な反応を得ている。

Ⅷ. 結論

１．精神看護学初学者の看護大学生155名の自由記述データをテキストマイニングにより解析し､結果を風景として解釈した結果､学生にとって「精神疾患を抱えて生きる人」とかかわることは､「人」や「患者」とかかわることとは明らかな質的相違が確認された。

２．上記結果と併せて、学生が自身の心理学的特性と対人状況の認知の傾向との関係を安全に知り、ディスカッションすることができるような教材（媒体）を試作し、その情報の解釈と活用について検討した。

３．予期的社会化の段階である学部教育において、精神看護など特に感情労働的な側面が強く要求される対人援助職者の社会化に必要な、自己の情動や認知などの特性に関する知識を得ること。そしてそれを安全に言語化するための「メンタルタスク」に寄与する教材を作成することにより、学内講義から精神看護学実習の連続性の中での予期社会化プログラムを視野に入れた教育的介入と具体的な教材（媒体）活用のイメージがより明確となった。

Ⅸ. おわりに

本研究知見を用いての教育的介入の詳細な評価は今後の課題であるが、予期的社会化プログラムの要素を盛り込んだ、精神看護学の体系的な教育プログラムの構築を視野に入れて検討を重ねたい。

また、教育という営みのもつ双方にとっての意味や、精神（科）看護に必要な素養の涵養に関しては、学生の可能性は勿論、教育場面での人格の交わりを通して養われるものに勝るものはない。考察結果を機械的・恣意的にあてはめることには慎重でありたい。

Ⅹ. 本研究の限界

Trend Searchの解析では、言葉どうしの結びつきの強弱は描出される言葉同士の距離や関係線の太さに反映されるが、本研究では比較検討がしやすい様に、関係線の太さのみに反映させる形で統一性を持たせて作図した。

テキストマイニングでは質的データを扱い、「再現性」は担保されるが､前処置としてのデータクレンジングや、結果の解釈は、やや恣意的･主観的にならざるを得ない部分がある。これら手法的な課題はあるものの、本研究の目的には概ね妥当な手法であると思われる。

Doing-Being Scale（α＝.72）は、看護大学生とってなじみ深い質問項目で構成した。因子分析により「問題解決志向・感情抑制的で、規範意識が高い」と「感情表出に比較的抵抗が少なく、規範意識が低い」という２因子構造を確認したが、尺度としては未完成である。

また、本調査は研究者が日々教育対象としている学生集団155名のみに対して教育上の必要性から調査をおこなっている。結果をその

まま看護大学生の特性として一般化するには限界がある。

注)Trend Searchのスプリングシミュレーションは、統計学的なアルゴリズムにより、関連のある様々な言葉同士が、あたかもスプリングで繋がれ、その結びつきや関係性の強弱によって相互がバランスよく釣り合う位置で固定される形で描画される。このソフトウェアによって描画された「風景」は、学生の心理学的特性に従って解釈・説明しうる特徴を持った概ね妥当性のある「風景」であることが確認されている（入江，2003)。

参考文献・図書

1．入江拓，清水隆裕（2011)：精神（科）看護における対人理解を目指すための基礎教育の要点，日本看護学教育学会誌，21，p140.

2．入江拓，清水隆裕（2012)：看護学初学者のユーモア特性，課題への志向性および，抱く対人状況の風景を指標とした精神看護学教育の要点，日本看護学教育学会誌，22，p221.

3．入江拓，松本浩幸，石野麗子（2005)：精神看護実習における看護学生の精神病者観の形成要因に関する一考察，聖隷クリストファー大学看護学部紀要，No.13，1-14.

4．入江拓(2003)：精神看護実習を行う看護学生の眺める「風景」の視覚化，聖隷クリストファー看護大学紀要，No.11，35-48.

5．入江拓(2002)： 看護基礎教育段階から取り組むバーンアウト予防のための予期的社会化プログラム構築の要点に関する提言，聖隷クリストファー大学紀要，No.10，11-30.

6．入江拓(2001)：文化的特徴から見た精神看護領域の看護職集団の志向性に関する一考察，聖隷クリストファー看護大学紀要，No.9，95-110.

7．入江拓，大江公子，仲田明宏(2010)：看護大学生が捉える精神障がい者のイメージの講義による変化，聖隷クリストファー看護大学紀要，No.18，35-43.

8．尾形真実哉（2008)：若年就業者の組織社会化プロセスの包括的検討，甲南経営研究，vol48，4.pp11-68.

9．川村友紀(2013)；看護学生が倫理的ジレンマと認識した看護教員の教授行動，岡山県立大学保健福祉学研究科修士論文.

10．藤井美和，小杉孝司，季政元（2005)．福祉・心理・看護のテキストマイニング入門，p126．中央法規.

11．増田真也(1994)：曖昧さに対する耐性と心理ストレスに関する研究，日本心理学会第58回大会発表論文集，p91.

12．Marton(1949):Social Theory and Social Structure. New York Free Press. pp319-322. 森好夫，中嶋竜太郎，金沢実訳（1961)：「社会理論と社会構造」，みすず書房

13．宮戸美紀，上野行良(1996)：ユーモアの支援的効果の検討，社会心理学研究，67(4)，270-277.

14.Wanous,J.P.(1980):“Effects of a realistic job preview on job acceptance,job attitudes, and job survival”,Journal of Applied Psychology, Vol.58, pp327-332.

使用ソフトウェア

Trend Search 2008（SSRI）

Word Miner（日本電子計算）